三河地震から学ぶ

1945(昭和20)年1月13日に、三河地方をマグニチュード6.8の直下型地震が襲いました。地震と津波により、約1200人の命が失われました。この地域における過去の大きな災害です。しかし、戦時中であったことから具体的な報道は一切されず、ごくわずかな記録のみが残されています。東海・東南海・南海地震が心配される今日。過去を振返り、大地震に備えてその教訓を生かしましょう。

約65年前

鳥取地震（直下型）
1943年9月10日
■震源：鳥取　【M7.2】

▼ 約10年

東南海地震（海溝型）
1944年12月7日
■震源：紀伊半島　【M7.9】

▼ 約1ヶ月

三河地震（直下型）
1945年1月13日
■震源：三河湾　【M6.8】

近年

兵庫県南部地震（直下型）
『阪神淡路大震災』
1995年1月17日
■震源：兵庫県南部　【M7.3】

▼ 約16年

東北地方太平洋沖地震（海溝型）
『東日本大震災』
2011年3月11日
■震源：宮城県沖　【M9.0】

▼ ？年

東海地震？東南海地震？南海地震？
????年??月??日
■震源：太平洋沖？　【M？】

三河地震体験談

城ヶ入町
岩瀬繁松さん
三河地震当時17歳

昭和19年12月7日の昼過ぎ、繁松少年は家の外にいた。大地が揺れ動き、立っていられなかった程で、繁松少年は柿の木にしがみついて自宅が揺れるのを見ていた。地震がおさまったときには、家は傾いていた。それが東南海地震であった。

その後も傾いた家に寝泊りする生活していたが、翌昭和20年1月13日の午前3時38分震源を三河湾とする三河地震が発生した。震源の蒲郡～三ヶ根の深溝～西尾市八ツ面の東～藤井町～和泉町に断層が走った。

地震発生時、ズドンと落とすような地震が起き、繁松少年は寝ている母親に外に出ようと呼んだ。自分が縁側にたどりついた時に家が倒れ、そのはずみで庭にあった籾殻の上に放り出され助かった。母親は1～2m後ろにいたはずだが、崩れてきた鴨居にはさまれ亡くなってしまった。

城ヶ入地区の230戸で60人が亡くなった。1軒で5人亡くなった家もある。火葬も村の火葬場では2人までしか焼けない。多くの死体は穴を掘って火葬した。戦時中はB29の空襲があったので、夜までに燃やしきらなければいけなかった。まるで生き地獄のようであった。

繁松少年は、その日のうちに合掌造りのようなわら小屋を作って、そこでの寝泊りが始まった。余震が続いた。震度4～5が18回もあり、過去の地震と比べても数が多い。地震後の家の後片付けも、最初は親戚も手伝ってくれたがそのうち一人で片付けることになった。百姓だったから食べることには困らなかった。

旧明治村より木材が援助された。家が倒れてしまった人たちと数人で、大八車で額田郡へ夜中に、歩いて青野橋を渡って行った。3mの長さの材木を3本も積むと大八車でも重くて精一杯で、舗装されてない砂利の道を帰ってきた。一日がかりで運んだが、今考えてもよくやったなぁと思いだす。

家の建て直しは、援助の工作隊が柱と屋根だけを建ててくれる。後は屋根瓦葺きから壁からすべて自分でやらなければならなかった。昔は近所の家を建てるのに手伝いに行っていたので何でもできた。今の人は自分では何もできないので心配だ。

過去の三河地震を振り返り「助けてもらおうと思ってちゃいかん。最後は自分の力で生き抜かなきゃいかん」と語る岩瀬さんでした。

2012/6/9(土)の安城市歴史博物館での歴博講座「三河地震を語る」より記事にご協力いただき、兵庫県立大学木村玲欧教授ならびに岩瀬繁松様に感謝いたします。

東海・東南海地震の発生に備え 60年以上も前にこの地域で起きた 三河地震を参考に

木村玲欧
兵庫県立大学准教授
「三河地震60年目の真実」著者（共著）

当時、海溝型の東南海地震の後に、直下型の三河地震が起きました。震度7に相当すると思われます。安城の南の地域（当時の明治村）に被害が多かったです。断層の真上にあると被害も大きいです。沿岸部は海溝型の地震による津波の危険が大きいが、内陸部は直下型地震の危険が大きいです。建物が壊れることが怖いです。大きな海溝型地震で大きく揺らされ、その後直下型地震で下から突き上げられて家が壊れたものが多いです。大きな海溝型地震の前後に直下型地震は必ず来ます。大きな海溝型の地震の前後には、地盤のバランスが壊れ直下型の地震が必ず発生します。

海溝型の東日本大震災の翌日に発生した直下型の長野県北部地震は、被災した人数が少なかったせいか、2週間くらい何の援助もされませんでした。報道もあまりされませんでした。この地域もそんな状況になるかもしれません。

東海・東南海地震が発生した場合、今の想定では25000人が亡くなり、100万棟が倒壊して、被害額は国家予算並の81兆円に達します。東日本大震災と東海・東南海地震の違いは、被災地の広さにあります。400年前の保永地震は、500～600kmにわたって断層が動きました。それと同じことがまた起きるかもしれません。範囲は東京～大阪の直線距離に相当します。その間も当然揺れます。津波も起きます。他の沿岸部に比べて三河湾は津波の心配は少ないものの、沿岸部から油ヶ淵まで遡ってくることが想定されます。

そして危ないのは高浜～猿投断層です。ある意味でまだ三河地震の余震が続いており、割れ残った高浜～猿投断層が動く可能性があります。この地震を想定すると30万棟が倒壊して11000人が亡くなり、名古屋南部から碧南まで被災します。

東海・東南海地震が発生して数十万人が亡くなったとしましょう。その1ヵ月後に直下型地震が起きて、仮に刈谷や知立や安城で数千人亡くなったとしても、他と比較した被害が相対的に低いので、救援物資は来ません。支援が来たとしても、まず名古屋などの都市部からです。被害が大きい碧南市・高浜市の沿岸部へは救援物資は送られます。輸送経路となる刈谷・知立・安城の人たちは、自分たちも被災しているのにもかかわらず、救援物資は南へ送らなければいけない状況に置かれます。支援は来てくれません。自分たちのことは自分たちで何とかしなければいけません。3日～1週間分の備蓄は必要があります。さらに、自分たちのことだけでなく、もっと被害の大きい人たちの救援もしなければいけません。人を助けるということは…自分のことは自分でした上に、さらに救援をする。ということです。それでも他からは、「たいした被害もないのになにやっているんだ」と批判を浴びるのです。

「普段のことすらできない。普段やってないことや考えてないことはできるわけがない」というのが被災者の声です。今やれることは、自分がどういう立場に立たされるのか。なにをするのか。防災とは、やるべきことをやって事前に備えて、慌てない自分をつくることです。